

パフォーマンスにおける行為について

-行為の結果によって生まれる感情は副次的な要素である。行為者自身に、情動、しかも際立って特異である情動が生まれない行為は至って日常なものの延長にある故に、舞台から排除する。

-パフォーマンスとは行為の断片的な連続であり、観客はその行為を判断する立場にある。行為者は観客の判断能力を遊ぶ必要がある。観客の判断能力は事象の存在論的把握（ここでは時・場所の存在/いま・ここにいることを確かめる（それも瞬間的に）ために推定を伴うものである。日常が無自覚に頼りにしているその能力が奪われることによって、観客に持ち込まれたこの現実性が喪失・崩壊するのである。

”生命のリアリティにたいする私たちの信頼と、世界にたいする信頼は、同じものではない。後者は何よりもまず、死すべき生命の永続性と耐久性よりはるかに優れている世界の永続性と耐久性から生まれるのである。...これに反して生命のリアリティにたいする信頼は、生命が感じられる時の激烈さ、生命がそれ自身を感じさせる時の衝動にかかっている。この激烈さは、あまりにも大きく、その力はあまりに根源的なものなので、それが寒気とか悲しみの形で現れるときは、いつもそれ以外の世界のリアリティは、一切暗黒の中に消滅するのである。” ハンナ・アーレント

-沈黙という行為は、行為者とその目撃者の相互的な関係の上に成り立っている。沈黙する聞き手こそ尽きぬ意味の泉である。対話はこの沈黙する者に向かって言葉を差し向ける。それは死んだ文字であり、いわば空の水瓶でもある。語り手は自ら言葉を発しているにもかかわらず、聞き手の言わんことを理解する。「生きた精神」を死んだ状態から、空の状態から救い出すことができるのはそれを進んで甦らせようとする一つの生命と再び接触するときだけである。